

- 巻頭インタビュー：西尾由佳理さん……………2
- 特集：女性が輝く社会に向けて……………4
- 助成団体レポート：環境とくしまネットワーク……………10
- サポーターインタビュー：キリン株式会社……………12
- 地球環境基金のサポーター……………14
- 若手プロジェクトリーダー育成支援プログラム……………15

地球環境基金 便り



特集

女性が輝く社会に向けて 環境保全に取り組む女性にフォーカス



地球環境基金サポーターのご案内……………

「地球環境基金サポーター」とは、継続的にご寄付いただくことで、環境NGO・NPOの環境保全活動をサポートする寄付の形です。
皆さま方からのご支援をよろしくお願いいたします。

サポーターの種類

毎月と毎年からお選びいただけます。

毎月 寄付金額	500円／1,000円／2,000円／3,000円／ 5,000円／10,000円からお選びいただけます。
毎年 寄付金額	1,000円／3,000円／5,000円／10,000円／ 30,000円／50,000円／100,000円から お選びいただけます。

*毎年のご支援の場合、指定口座からの自動振替は、翌年以降も初年度と同時期になります。

ご寄付の方法

金融機関の指定口座から自動振替をご利用いただけます。
*VISA、Masterのクレジットカードをお持ちの方は、
下記オンライン(申込書不要)で受付けております。
<http://www.erca.go.jp/jfge/donation/raise/supporter.html>

*申込書を郵送、またはWEBからお申し込みいただけます。

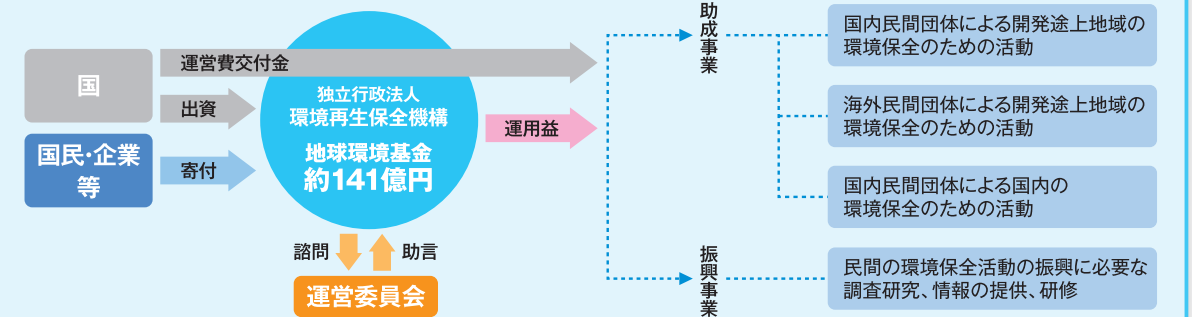
サポーターになっていただくと

- 広報誌を発送します。
 - お名前をホームページやニュースレターなどで紹介させていただきます。
- *ご寄付は税制上の優遇措置を受けることができます。



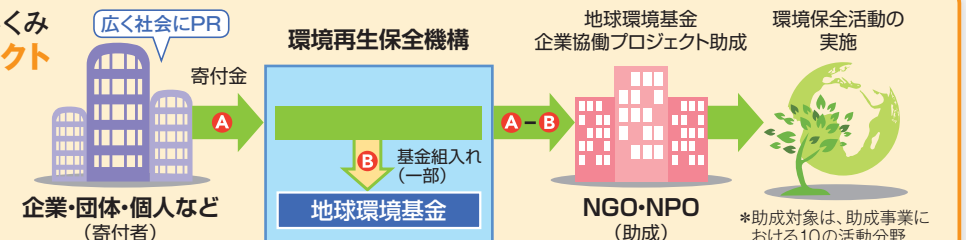
地球環境基金とは

環境再生保全機構は、国の出資金と民間からの寄付金により「地球環境基金」を設け、その運用益と国からの運営費交付金により、国内外の民間団体(NGO・NPO)が行う環境保全活動へ支援を行っています。



寄付者の貢献が目に見える新しいしくみ 地球環境基金企業協働プロジェクト

企業・団体・個人などからの寄付を原資に、地球環境基金が寄付者名を明らかにして、国内外の民間団体(NGO・NPO)が行う環境保全活動へ直接助成を行います。



詳細は、<http://www.erca.go.jp/jfge/kigyoyou/gaiyo.html>

表紙写真



インドのコットン畑で

明るい表情の少女たちですが、当地では児童労働(特に少女)や農薬使用による健康被害が問題となっています(本誌9ページ参照)。

写真提供：特定非営利活動法人ACE

イベント情報

「ロハスフェスタ万博2016Autumn」に、地球環境基金が助成団体「大阪自然史センター」と共同出展しました。団体のブースで行った「ダンゴウオぬりえ缶バッチづくり」に多くの方々に参加され、ダンゴウオの特徴に興味を持っていただきました。

「WOMAN EXPO TOKYO 2016 Winter」に地球環境基金が出展しました。助成団体「河北潟湖沼研究所」による「お米の田んぼづくりから食卓に届くまで」のプレゼンテーションに、多くの方々から関心が寄せられました。



Twitter

地球環境基金ではツイッターで情報発信を行っています。
アカウント名：地球環境基金
アカウントID：@ERCA_kikin
URL：http://twitter.com/ERCA_kikin



編集後記

本号では、現代社会における女性の役割や課題、活動を通して「女性が輝く社会」の実現に向けた特集を組みました。環境問題を身近な問題として捉え、最前線で活躍する女性の方々の鼎談をぜひご一読ください。

学生時代、先達から学んだ 環境保全に対する姿勢

大学るとき、倉本聰さんやCWニルさん、椎名誠さんらがつくった環境団体「CCC自然文化創造会議／工場」の活動に参加しました。そこでは、植林や水辺の生物調査、環境教育コンクールなどのお手伝いをし、本当に勉強になりました。人間さよければいいのではなく、地球上に生きているすべての生物が共存していく、そういう本質的なところを教えていただいた気がします。

例えば、ニルさんの「四季のある日本は、多様な生物が生きている豊かな国土。そこに住んでいる日本人が、植物の名前が分からなくなるなんて、もったいないよ」という言葉。それが

五感で感じたい自然、 その体験が環境意識を育む

日本テレビの人気アナウンサーとして、同局の看板番組『ズームイン!! SUPER』や『24時間テレビ「愛は地球を救う」』の司会を務めた西尾由佳理さん。

学生時代に環境活動に参加して以来、日テレ時代にも番組内のエコ担当キャスターに志願するなど、環境に関心を持ち続けてきました。若い世代の環境意識を高めるにはどうすればいいのか、働く女性として、また一人の母親としてのお考えを伺いました。

西尾 由佳理さん

など、自然を体感することも大事だと思います。先ほどお話ししたCCCでは、環境教育コンクールで優秀だった学校の生徒を環境先進国・ドイツに招待したのですが、そこには土の上をはだして歩くプログラムがありました。自分の足で大地に触れ、景色を見て、空気を感ずる…。そういう原体験が大人になつてから生きてくるのではないのでしょうか。

最近の若い世代には農業をやるうとか、古い家をリノベーションして大切に使うといった動きもあり、環境や循環型社会に興味がないわけではありません。彼ら彼女らがさらに前に進むには、テレビやネットではなく、実際に自然に触れて自分で感じるが一番だと思います。CCCの活動やリポーターとして各地を訪れる中で、特に忘れられないのが白神山地のブナ林。ちょうど秋で、染まった木々は鮮やかで美しく、地面は積もった枯れ葉でふかふか。まるでスポンジの上を歩いているようでした。そんな自然の素晴らしさを感じるとともに、環境を守るために自分は何ができるのか、一歩先を考えてほしい。それが具体的なアクションにつながると思うのです。

私たちは経済発展した社会の恩恵を受けていますが、同時に地球に生かされている「生物」という認識を持つてほしいですね。子どもが生まれてからはなおさら、美しい景色やおいしい空気を残してあげたいし、子どもたちに見て感じてもらいたいと思うようになりました。私自身、例えば洗う前にお皿の汚れを拭くとか、できる限り長く使えるものを選ぶなど小さなことしかできていませんが、そんなコツコツした積み重ねも大切だと感じています。

女性の家事の負担が多かったこれまでの、家庭での環境活動も女性に頼るところが大きかった気がします。これからは家族みんなで環境に貢献できるようになることが大事だと思います。でもリードしていくのは、まだ妻やお母さんの役目かもしれないですね！

ら、CCCの活動の一環でドイツの環境教育の現場を訪ねたとき、現地の小学校の先生が「エコロジーとエコノミーとカルチャー、この3つがうまく共存しなければならぬ。そのためにどうすればいいのかを考えることが大事」と言っていたのも印象に残っています。

流行をつくり出し消費させることで、右肩上がりの経済成長を実現する。しかし、それは環境破壊につながる…。私自身マスコミで働く中で、ある意味、消費をおおる側にいるのではという矛盾を感じたことがあります。だからこそ、チャンスがあれば、本当の豊かさとは何かという問題提起ができればいいなと。そんな思いもあり、『ズームイン!! SUPER』ではエココーナーを提案し、その担当キャスターに就くことができました。

忘れられない自然体験は 白神山地のブナ林

日テレ時代、出前授業（日テレ出張エコ教室）に出掛けて驚いたのは、子どもたちの意識が高く、よく勉強していたことです。子どもがゴミの分別をするようになれば、親もやらざるを得ないので、子どもへのアプローチは効果的。考えてみると、私たち大人はきちんとした環境教育を受けているわけではありません。大人にこそ環境教育が必要なのでは、と思つたくらいです。

また、学習だけではなく、おいしい空気とか美しい景色

西尾由佳理（にしお・ゆかり）
1977年千葉県生まれ。東京女子大学現代文化学部卒業後、2001年日本テレビ入社。『スポーツMAX』のアシスタントを務めた後、2005年から7年間『ズームイン!! SUPER』の女性司会者、ならびに『24時間テレビ「愛は地球を救う」』の総合司会を担当。11年日本テレビを退社後、フリーに。学生時代から環境問題に関心があり、環境団体「CCC自然文化創造会議／工場」の活動に参加。日本テレビアナウンサー時代にも雑誌『ソトコト』に環境に関するコラムを執筆していた。07年に『ズームイン!! SUPER』でエコ担当キャスターに就任、08年にはeco検定に合格。

Yukari Nishio



日テレ時代の「こどもエコ教室」の様子

感動の地・白神山地のブナ林で



特集

女性が輝く社会に向けて

環境保全に取り組む女性にフォーカス

鼎談

本鼎談は、2016年11月24日、
広告社株式会社（東京・銀座）の会議室で開催された。
左より、萩原なつ子さん（立教大学社会学部教授）、
中村玲子さん（ラムサールセンター事務局長）、
飯塚優子さん（住友林業株式会社CSR推進室長）

環境に敏感な女性の視点を生かそう!

現在、さまざまな分野で「女性が輝く社会」の実現に向けた動きが活発になっています。では、環境分野ではどうなのでしょう？ 今回は、NGO・NPO、研究者、企業という異なる立場の3名にお集まりいただき、環境保全活動における女性の役割や課題、そして活動をさらに発展させるためのヒントなどについて伺いました。



意思決定の場でも増やしたい女性の数

―最初にご自身の環境問題との関わりを簡単に紹介してください。

中村 NGO活動を始めて30年になります。大学を出てメディア関係の仕事をしていて1980年代、バードウォッチングがはやり始め、たまたま行った日本野鳥の会の催しでハマりました。最初は趣味でしたが、メッセージを発信する仕事をするなら、もっと積極的に関わろうと、日本野鳥の会のスタッフに4年間勤めた後、「ラムサールセンタール」を設立したのが90年です。

萩原 私の場合、最初は環境というより公害問題ですね。くしくも、私が生まれた56年は水俣病が発見された年。小・中学校時代は連日、公害問題が報道されていました。大学進学のために上京して驚いたのは、東京の水のまずさ。水が飲めず清涼飲料水ばかり飲んでいて体調を崩しました。「内なる自然の破壊」を経験したのです。そこから食品や農業、開発問題へと関心が広がっていきました。

もう一つの大きな出会いがエレン・リチャーズスワロー（※1）の伝記。彼女は「エコロジー」を学問として

成立させ、ライフスタイルを変えなければダメということを100年も前に提言した人です。

飯塚 大学時代、レイチェル・カーソン※2の出身校に1年間留学し、『沈黙の春』を読んだ思い出があります。環境との関わりは10年ほど前、当時在籍していたソニーのCSR部に異動してから深まりました。私は環境筋ではないのですが、その分、外部からの視点が生かせるのではと考えていて、現在は住友林業で、企業経営の中でいかにCSRと事業を一体化していくかに取り組んでいます。

―環境活動における女性の立ち位置はどう変化してきたのでしょうか。

中村 はつきりと感じるのは、活動する女性の数が増えたことです。でも、行政との少し大きな会議になると、出席者が全員男性という傾向はつい最近までありました。

萩原 そう、意思決定の場になると、なぜか女性がいなくなる。NPO法ができて約20年、現場では女性が活躍しているけれど、組織のトップとなると男性が多い。

中村 それは、職員に給料を払えるぐらい大きな組織になると、家族を養う立場にある男性の職業とな

り得るからではないでしょうか。

萩原 アメリカのエコフェミニズムの本の中に「雄鹿がやってきて雌鹿を蹴飛ばす」という言葉があつて、すごく印象に残っています。環境がビジネス、つまり金もうけになると分かると、男性がやってきて女性を周辺に追いやるという構図ですね。

飯塚 私は男女雇用機会均等法後の世代で、女性だからダメといった経験をすることはありませんが、「生徒会長は男子で、書記は女子」といったパターンは今でもあつて、「私はこのポジションで十分」と女性が最初から遠慮してしまう。若い世代でも、なぜか小さくまとまってしまう傾向があり、気になってい

環境活動を支えた女性の生活者としての視点

―環境活動において、女性はどういうような役割を担ってきましたか？

萩原 例えば、石垣島新空港建設問題では、おばあちが海を守るために立ち上がりました。守りたのはサンゴ礁だけではなくて、海そのものののだと。石垣島のおばあちにとって海は命の源であり、ネイティブアメリカンの言葉でいえば「未来からの借り物」であると。つ

国内で活動するNGO・NPOも

足元だけでなく、時々

「世界という空」を見上げてください。

中村 玲子

ラムサールセンター事務局長

(なかむら・れいこ)

1970年に東京女子大学を卒業後、新聞社などで編集業務に従事。90年にラムサールセンター設立。事務局長として国内、アジアを中心に活動。2005年にアジア地域でのラムサール条約の普及・啓発活動などが評価され、日本人で初めて「ラムサール湿地保全賞」を受賞。



Reiko Nakamura

まり、それを壊すことは子どもの未来の可能性を奪うことになるわけですね。そこに、女性ならではの視点があります。

飯塚 石垣島で暮らす方々は、生態系という言葉は使わなくても、一つ崩れると全体に影響を及ぼすことが肌で分かっていたんですね。

萩原 琵琶湖石けん運動（※3）も、北九州の「青空がほしい」もそうです。毎日の生活の中で気付きがあり、女性はお金には代えられない価値を守ろうと頑張った。

飯塚 価値というのは、どういう時間軸でモノを捉えるかにもよりますね。弊社では、新入社員全員が社有林のある別子銅山（愛媛県新居浜市）に登ります。一時は煙害や過伐採で荒れた山になっていたのを植林で再生させた場所です。そこで、120年も前に植えた木を目の当たりにすると、「時間」を感じずにはいられません。まさに、自然は未来からの借り物であり、私たちは未来に対する責任があると思えるのです。長い時間軸でモノを捉える感覚を身に付けることができた、わが社の社員はラッキーだと思います。

中村 女性が環境活動に熱心になれる背景には、しがらみのなさもあ

ると思います。どこまで一般化して

いいか分かりませんが、女性は男性のように家の名前を守ったり、社会的な地位を気にすることが少ないため、こうと決めたら突っ走れる。

萩原 一家の大黒柱と想っている、と、頭の中がお金でいっぱいになってしまうけれど、最近では、男性でも自分の生活を大切にしながら働きたいという人が増えているので、ここはチャンスかもしれません。

中村 女性でも、猛烈なスピードで動くビジネスの最前線にいれば、「環境のことは気になるけど、できないわ」となってしまう。

飯塚 男性女性という話になったとき、私がいつも思うのは、専業主婦がいる世帯パターンはここ数十年にすぎないということ。かつて女性は家の商いを手伝うなど、普通に仕事をしていました。歴史的に見れば、専業主婦という存在の方がまれではないでしょうか。

萩原 高度経済成長時代は、その方が都合がよかったのね。

飯塚 住友林業は、まだ女性社員数が少ないのですが、女性が活躍するシーンは徐々に増えています。例えば、産業廃棄物削減や省資源といった課題。短期間に大きな結果を求めがちな男性に比べ、女性

※1

「エレン・リチャーズスワロー」

Ellen Henrietta Richards Swallow (1842~1911)

アメリカ初的女性職業化学者。環境教育や公衆衛生学、家政学、消費者運動を生み、各分野の「母」と呼ばれるパイオニア。

※2

「レイチェル・カーソン」

Raychel Louise Carson (1907~1964)

アメリカの海洋生物学者・作家。1962年出版の『沈黙の春』で、合成化学物質の大量使用による危険性を訴えた。

※3

「琵琶湖石けん運動」

1977年、琵琶湖に淡水赤潮が発生。その原因の一つであるリンを含む合成洗剤の使用をやめ、粉石けんを使おうと訴えた運動。



ラムサールセンターが協力している東インドオリッサ州で現地NPOが開催した環境教育プログラム
写真提供：ラムサールセンター



H a g i w a r a

萩原 なつ子

立教大学社会学部 教授
21世紀社会デザイン研究科 教授
(はぎわら・なつこ)
明治学院大学英文学科、同社会学部
卒業後、お茶の水女子大学大学院修
士課程修了。財団法人トヨタ財団アソシ
エイト・プログラム・オフィサー、宮城県環
境生活部次長、武蔵工業大学環境情
報学部助教授などを経て現職。認定特
定非営利活動法人日本NPOセンター副
代表理事。専門分野は環境社会学、非
営利活動論、ジェンダー研究。

N a t s u k o

私の専門は「環境と女性学」。
この学問の枠組み自体が
不要となるような社会をつくりましょう！

は小さなことをコツコツやり続けて
成果を出す。小さなアイデアや積
み重ねが大事なんですね。
萩原 イギリスに「女性の環境
ネットワーク(Women's Environ-
mental Network)」という団体
があり、そのモットーは「Small
decision making will change the
world.」つまり、小さな政策決定が
世界を変えるということ。日本で
もやとエシカルコンシューマー(※4)
が話題になっていますが、何を買う
かという小さな政策決定、小さな
ことの積み重ねが社会を変えてき
たのです。
中村 環境の側面から生活者の
視点を考えると、かつては生活の場
に豊かな自然があったから、気付
けた。東京でもモズがいたし、雨の
日にはアジサイの葉をひっくり返し
てカタツムリを見付けて遊ぶこと
もできました。
飯塚 去年採れた木の実が今年
はないとなれば、環境の変化に気
付きますよね。でも、今の子どもた
ちは、コンビニの商品ラインアップの
変化ぐらいしか分からないかも。
萩原 だから、環境教育が始まっ
たのです。昔は毎日が環境教育で
あり、自然体験でした。
中村 気付きの物差しがなくなっ

た今、それを子どもたちにどう与
えていくか、これは課題ですね。
**開発途上国での支援は
環境保全＋所得向上で**
―開発途上国ではどうでしょう？―
萩原 現在、「環境と女性」といっ
たとき、課題の中心は開発途上国
になるでしょう。というのも、開発
途上国では森で拾った薪で煮炊き
をしたり、水くみなどの役割は女
性が担うため、環境の変化に敏感
にならざるを得ないからです。
中村 東インド・オリッサ州の現場
の例でいえば、男性は漁に出てしま
うので、NGO・NPOが行う環境プ
ログラムの受け手、あるいは実践者
は圧倒的に女性です。CO2をほ
とんど排出しない生活の中でも環
境負荷を減らそうと行動する彼
女たちに接すると、電気をふんだ
んに使っている日本のあり方が恥
ずかしくなります。彼女らは小規
模な養蜂を行い、家計の足しにす
るといったことにも積極的に取り
組んでいます。
萩原 インドといえば、「チプロ運
動」(※5)。木を切られると暮らし
が成り立たないと、木を抱きついて
伐採を阻止。彼女らは命懸けで
チエンソーに向かっていました。

※4
「エシカルコンシューマー」
倫理的消費者という意味で、人権や
環境、動物などに配慮して生産され
た商品を選択購入するという消費
者活動。

※5
「チプロ運動」
1970年代初め、北インドのワッ
タラカンド州で始まった森林保護運
動。チプロはヒンディー語で「抱擁」
という意味。



女性たちは森林伐採に抗議し、木を抱きつ
く「チプロ運動」を展開
©福岡アジア文化賞委員会

組織や活動の発展には、

女性や若者など従来にはない

「多様性の獲得」が欠かせません。

飯塚 優子

住友林業株式会社
CSR推進室長
(いいづか・ゆうこ)
1992年津田塾大学文学部卒業後、ソ
ニーに入社。広報、IR、海外などを経て、
CEOのスピーチライターを務めた。CSR
部でSRI(社会的責任投資)対応を担当
し09年退社。外資系企業を経て、2012
年住友林業株式会社入社。15年4月より
現職。

I i z u k a



Y u u k o

飯塚 開発途上国では所得向上へ
の支援も重要で、弊社もインドネ
シアで地域の方々をサポートして
います。苗を無償提供し、育った木
の買取保証をするともに、アグロ
フォレストリー(※6)を支援。そう
することで、違法伐採や焼畑を防
げるし、ビジネスとしても原材料の
安定調達が可能となり、Win・W
inの関係が築けます。
萩原 余談ですが、過去に実施し
た所得向上プログラムに鉄則があ
りました。それは、商品を男性に
売りに行かせないこと。男の人は、
手に入れたお金でお酒を飲んじや
うから(笑)。女性は子どもの教育
費に使うんですけれどね。
飯塚 バングラデシュのグラミン銀
行が行うマイクロファイナンスも女
性が対象ですね。
萩原 はい、インドのSEWA(Self-
Employed Women's Association :
女性自営者協会)もそうです。

今後の支援のあり方は？ 出席者からの提言

―最後に、地球環境基金やNG
O・NPOの活動のあり方につい
て、ひと言お願いします。

萩原 地球環境基金の創設期にア
ドバイスをしたり、EPO(環境パー

トナーシップオフィス)の設立にも関
わりました。基金さんの、NGO・N
POを主体とした協働事業への支
援に果たす役割はますます大きい。
「環境的公正」と人権などの「社
会的公正」を同時達成するような
活動への支援を期待しています。
中村 開発途上国のNGO・NPO
への支援を強化してほしいですね。
地球環境基金の助成の枠組みでい
えばイ案件やロ案件(※7)ですが、
イ案件でも日本のNGO・NPOが
全部お膳立てするのではなく、カウ
ンターパートを育てたり、現地住民
のキャパシティビルディングにつな
がる支援であればと思います。
飯塚 企業としては、NGO・NPO
との連携・協働はとても大事だ
と考えていますが、環境保全活動
で成果を取っている団体でも、例
えばマネジメント力が弱いために、
自立が難しいといった現場を目に
します。それぞれ得意分野があ
ると思うので、団体間で弱点を補
完できるような連携ができれば、
企業はもっと支援しやすくなりま
す。この点を含めて、基金さんには
広く情報発信をしていただけると
いいですね。
―本日はお忙しい中、貴重なご意
見をありがとうございました。

※6
「アグロフォレストリー」
植林し、その樹間で家畜や農産物を
飼育・栽培する農林複合経営。農業
をしながら森を再生する手法とし
て注目されている。

※7
「イ案件、ロ案件」
両案件ともに開発途上地域の環境
保全活動に対する助成だが、イ案件
は活動主体が国内民間団体、ロ案件
は海外民間団体という違いがある。



住友林業がインドネシアで地域住民へ植
林指導などを通して実施する社会林業
写真提供：住友林業株式会社





地域に社会に、そして世界に向けて発信。環境という舞台で発揮される“女子力”に注目!

環境問題について早い時期から声を上げてきた女性たち。今、第一線で活躍する彼女たちは何を考え、どう行動しているのか、地球環境基金が助成している団体に、現場の声を伺いました。

各地の市民団体や電力会社、企業などでパワフルな女性が増えています。

再生エネルギーの小規模な電力会社を支えるのは消費者の声

Voice 04

事務局
吉田明子さん
(FoE Japan)



パワーシフトキャンペーン運営委員会

<http://power-shift.org/>

活動名

パワーシフト～電力小売自由化に向けた再エネ選択促進

プロジェクト概要

パワーシフトは、「再生可能エネルギーを重視する電力会社を選ぼう」と呼び掛けるキャンペーンです。私たち自身の電気料金というお金の使い道が、将来の社会をつくります。

Q パワーシフトに関する女性の関心は?

生活に密着する問題であること、また3.11以降のエネルギー問題への関心の高まりから、電力会社の選択を具体的に考えていたり、気になっている人が多いと思います。「生協の電力会社や地域の電力会社にすでに乗り換えた!」という方にも出会います。

Q 女性に対して特に訴えたいこと、取り組みは?

電力の自由化=安さ、サービスと思う方が多いのではないのでしょうか。私たちは「安さではない選択」呼び掛けています。なぜなら、安さの追求は持続可能ではない電気を選択につながってしまうからです。選ぶ際は、電力会社の取り組みやビジョンをチェックしてください。



「私たちの選択で、社会を変えよう!」と、イベントなどでアピール

組織としても、出産や子育てへの配慮ができるようになりました。

オーガニックやエシカルを意識した消費行動を促す

Voice 03

代表
岩附由香さん



特定非営利活動法人ACE

<http://acejapan.org/>

活動名

インドのコットン栽培における環境・人権課題および環境に配慮した活動に関する普及啓発活動

プロジェクト概要

インドのコットン生産地の環境問題の改善を目的とし、オーガニックコットンなど環境や人権に配慮した消費やビジネスが日本国内で浸透するよう、環境教育や倫理的な消費の啓発活動を行います。

Q 活動に対して男女による関心の差はありますか?

男女の差はほとんどないと思いますが、私たちが取り組むカカオやコットンの生産現場での児童労働は、女性が好きなおチョコレートやファッションと関連が深いので、女性の方が関心を持ちやすいという側面はあるでしょう。コットン畑での児童労働は少女の方が多く、児童婚や結婚持参金、差別などインド特有の問題もあります。

Q 今後の活動で、特に女性に期待したいことは?

消費という観点からいうと、家庭で使う日々の買い物をするのは女性の方が多いように感じます。女性には「行動する消費者」として、率先してサステナブルな消費を実践していただけたらと考えています。



インドのコットン生産地で、農民に農業使用や健康被害の状況をヒアリング

自分の子どもも農業の未来を担う子どもたちも見守って育てます。

農業や農村の現状を、女性の関心が高いファッションでアピール

Voice 02

理事長
大津愛梨さん



特定非営利活動法人田舎のヒロインズ

<http://inakano-heroine.jp/>

活動名

目覚めよ農家女性! 農家が食べ物もエネルギーも人もつくる社会へ。

プロジェクト概要

次世代育成事業として農家の子女を対象とした合宿を実施。また、農作物もエネルギーもつくれる兼業農家を目指し、ラジオ感覚で聞けるオンライン講座を作成・配信するなど、農業・農村の価値を高めるための情報を発信します。

Q どのような活動体制で臨んでいますか?

現在の役員は40歳以下の現役若手女性農家。緩やかなネットワークとして結成された「田舎のヒロインわくわくネットワーク」を、2014年に団体名・体制を刷新して再出発。農を営む女性が自ら考え行動し、社会に訴えるという意思を受け継ぎながら、世代交代を果たしました。

Q 女性の視点を大切に活動事例は?

農村の「守りたい風景」を題材にした「風景を着るファッションショー」の開催や、家事・育児に忙しい女性が農業をしながら学べる「オンライン講座」の開設があります。また、農家の子どもたちが自主的に農業経営を学べる夏合宿「リトルファーマーズ養成塾」も実施しています。



「風景を着るファッションショー」に参加した、地元の農業科に通う高校生たち。布地に農村の風景がプリントされている

多様なコミュニティの核として女性の活躍に期待

Voice 01

理事・事務局長
福岡真理子さん



一般社団法人あきた地球環境会議

<http://www.cееakita.org/>

活動名

世界へ広がれ! 日本のアクション ~“サバ州” STOP地球温暖化防止センター設立

プロジェクト概要

マレーシア・サバ州において、地球温暖化対策についての加速度的な意識・行動変容の促進を目指し、地球温暖化防止活動推進センターの設置・キックオフ・基盤整備を図ります。

Q 活動主体、あるいは参加における女性の割合は?

法人のスタッフ構成は男性1名・女性4名。参加者の男女比率は、年間平均14件ある事業によって異なります。今回のマレーシア・サバ州でのセンター設置に向けた活動でいえば、参加者の約80%が女性で、明るくアサーティブコミュニケーション[※]を展開しています。

[※] Assertive Communication: 自他共に尊重し合いながら人間関係を築く方法。

Q 活動地・サバ州で期待される女性の役割とは?

多民族・多宗教という複雑な社会構成を持つサバ州。地域の環境教育に関わる教員や環境NGO・NPOスタッフの多くは、イキイキと輝く女性たちです。彼女らが地域の核となり、伝える役割を担って活躍することが、州全体への波及効果を高めると期待しています。



地球温暖化防止授業に参加した生徒たちを目の当たりにすると、未来に多くの可能性を感じる

地域の隠れた資産を明らかにする試み

「自然エネルギーは、その地域の気候風土に深く関わる形で存在しています」。そう語るのは、特定非営利活動法人環境とくしまネットワークの代表理事・島田公（いさお）さん。「ただ、具体的に見えないから、その価値がなかなか分からない。そこで、このタイプの機器を使えば、これくらい発電できるという実証データを示すことが理解への近道だと考え、活動を続けています」

助成3年目を迎えた本プロジェクトは、徳島県勝浦郡勝浦町、香川県高松市塩江町をはじめ四国の5カ所（左ページの地図参照）を対象として、実証データの収集と普及啓発活動を地域のNGO・NPOなどと連携して進めている。



体験会を前に市販の小型水力発電機を渓流に設置する島田さん

「小規模・分散型の自然エネルギーは、農業や食品製造業、観光業などと連携して活用できれば、地域の雇用拡大にも結び付くと思います。だからこそ、実証実験の段階から地元の皆さんに参加していただくことが大事なんです」

小水力発電体験会に30名を超す参加者

今回訪ねた高松市塩江町での活動には、地元の特定非営利活動法人奥塩江交流ボランティア協会が協力している。当協会は塩江町にある廃校となった中学校保育所施設を拠点に活動しているが、当日はいくつか用意されたプログラムの一つとして、午前中の1時間、施設脇を流れる渓流で小水力発電体験会を開催。地元の人をはじめ、高松市内などから30名を



島田さん手作りの水力発電機を例に仕組みを説明

自然エネルギーで、四国（志国）創生！

前列中央が代表理事の島田 公さん。左側が特定非営利活動法人奥塩江交流ボランティア協会代表の大西祐二さん。その他の方は同協会のメンバー

超す参加者があり、盛況となった。「ほら、見てください」と島田さんが発電機をつないだデスターを示すと、2ボルトほど発電していると表示された。



発電量をデスターで表示し、その後LEDやパソコンにつないで発電を実感してもらう

太陽光発電を活用した電気柵の実証実験も

加者の意識は確実に変わります」と話す。

高松市塩江町は徳島県に隣接する山間部で、全国的に問題となっている鳥獣被害が増えている。そこで、新たな取り組みとして始めたのが、太陽光発電を活用した電気柵の実証実験だ。小水力発電体験会が開催された場所から、険しい山道を車で登ること約20分。実験サイトは標高680mの山肌に広がる耕作地で、イノシシの被害に悩む所有者が協力を申し出た。

設置されているのは、小さな太陽光発電装置とそれにつないだ電気柵。この電気柵に触れると瞬間最大8千ボルトが発生する仕組みになっている。

島田さんいわく、「センサーカメラを設置しているので24時間監視が可能ですが、ここは圏外でケータイが使えないため、データの送受信ができません。これからは現場チェックのために、週に一度、通うことになりま

す」。期間限定の実証実験とはいえ、なかなか大変な活動である。

助成団体レポート 行ってきました！ 「小水力発電体験」 の現場



耕作地に設置された周囲約200mの電気柵。手前の棒にセンサーカメラを設置



太陽光発電装置のパネルは約30cm四方で12ボルトのバッテリーを内蔵

来年度は、これまでに蓄積した実証データと各地域で構築してきたネットワークをベースに、事業化に向けた提言を予定しているという。

取材協力
特定非営利活動法人環境とくしまネットワーク
<http://kankyoutokushima.web.fc2.com/index.html>

徳島県鳴門市を本拠地に、四国各地の過疎地で「地エネ利活用プロジェクト」を進めている特定非営利活動法人環境とくしまネットワーク。今回は、活動現場の1つ・香川県高松市塩江町での活動の様子をレポートする。

農山漁村で自然エネルギーを地産地消！





キリンがレインフォレスト・アライアンス認証取得を支援しているスリランカのクレイグヘッド農園

キリン

「キリンビール」をはじめ、「キリン 午後の紅茶」や「キリン 生茶」「シャトー・メルシャン」などでおなじみの総合飲料メーカー・キリン株式会社。同社は、2050年に向けた「キリングループ長期環境ビジョン」を掲げる、日本有数の環境先進企業です。また、同社には、地球環境基金事業の1つである「全国ユース環境ネットワーク促進事業」を支援していただいています。

※「全国ユース環境ネットワーク促進事業」の詳細は、<http://www.erca.go.jp/jfge/youth/>

サポーターインタビュー
NPOを支える方々

Heart & Heart

共通価値の創造を目指し 環境課題に取り組み

キリングループは社会的課題の解決と企業の成長の両立を追求するためにJGSA (Creating Shared Value / 共通価値の創造) を経営戦略の中核に据えています。中でも環境はすべての課題の土台という認識の下、2013年に「キリングループ長期環境ビジョン」を策定。これは、50年までに資源循環100%社会の実現を目指すという意欲的な取り組みです。具体的には、キリンの事業にとつて大切な原料である「水資源」と「生物資源」、製品化に必要な「容器包装」、そしてそれらすべてに影響を与える「地球温暖化」への対応という4つを重点テーマとして掲げています。

例えば「生物資源」の持続可能な利用では、「キリン 午後の紅茶」の茶葉主要生产地・スリランカで、紅茶農園が持続可能な農法認証制度「レインフォレスト・アライアンス認証」を取得するための支援を実施。13年からの3年間で70農園がトレーニングを行い、

環境保全の次代の担い手である若者に 学びや発信の場を提供

30農園が認証を取得しました。また、「容器包装」では、リターナブル瓶の軽量化に取り組み、大瓶に続いて国内最軽量中瓶を開発しています。

発信を重視する「キリン・スクール・チャレンジ」

多岐にわたる取り組みの中から、未来の環境保全の担い手であるユースへの支援について、同社の執行役員・林田昌也さんにお話を伺いました。

「中高生向けのプログラムに『キリン・スクール・チャレンジ』があります。

これは環境NGO『こども国連環境会議推進協会(JUNEC)』との協働プログラムで、午前中に二つの講座、午後からは講義を受けてのワークショップを開催。ワークショップでは、アウトプットとしてポスターを作ったり、作品を写真撮影してインスタグラムに上げ、発信しています。発信を重視するのは、単に『良い話を聞いたね』で終わりにたくないからです。作品を作る中で、



「キリン・スクール・チャレンジ」のワークショップの様子(右)、インスタグラムにアップした作品(左)

環境と自身の関わりを見つめてほしい。私たちは、彼ら・彼女らが家庭や学校、地域に帰ったとき、周囲に影響を与えるインフルエンサーとして活動してくれることを期待しています」

では本プログラムのテーマの一つに、スリランカのレインフォレスト・アライアンス認証を取り上げた意図はどこにあるのでしょうか。

「午後の紅茶のメイン・ユーザは10代の男女。でも彼ら・彼女らは、日本の紅茶の約6割がスリランカからの輸入で、

「全国ユース環境ネットワーク 促進事業」への期待

キリンは「全国ユース環境ネットワーク促進事業」を支援し、全国大会への協賛とともに、高校生の会社訪問を受け入れています。その意義について林田さんは、こう話します。

「次代を担う高校生が環境をはじめとする社会的課題を理解するために、あるいは自らが行動を起こせるよう、いろいろな機会を提供することは極めて有用です。また、参加意欲を



キリンの基盤技術研究所を訪れた横浜市立横浜サイエンスフロンティア高等学校の生徒たち

高めるアワードという形式も分かりやすいので、引き続き協力させていたきたいと思います。

今後は、北海道と東京の高校生、高校生と地元の農家というように、地域や立場が異なる人が知り合い、交流できる場が増えるといいですね。例えば、地域という単位で環境を考えれば、市民や企業など他者との協働が必要になるし、環境だけでなく地域の活性化など別の課題も見えてくるでしょう。簡単ではありませんが、若い人たちがより広い視野で環境を捉え、活動に取り組めるよう工夫していただければと考えます」

※写真提供:キリン株式会社



企業14社と大学生50名が交流した「サステナブルカフェ」。2016年10月23日キリン本社で開催



小学生以上を対象に、キリン横浜工場のビオトープで毎週日曜日に開催している「自然の恵みを感じるツアー」



50年以上、ホップの契約栽培が行われている遠野市で開催した「遠野ホップ畑生きもの観察会」



天然記念物アユモドキの人工繁殖に協力した地元の小学生が岡山工場のビオトープで放流



「キリンライブラリー」10周年セレモニーを午後の紅茶用茶葉をつくっているキャンディで開催



スリランカの小学校に年100冊程度の図書を寄贈する「キリンライブラリー」は2007年にスタート

若手プロジェクトリーダー育成支援プログラム

1期生
支援終了!

2014年度より始まった、未来の環境保全活動を担う人材育成を目的とする「若手プロジェクトリーダー育成支援プログラム」。1期生が3年間の研修を終え、昨年12月10日に開催された「平成28年度地球環境基金活動報告会」において、その成果を発表。当日は、1期生11名の他に3名のコメンテーターが出席し、今永正文氏（一般社団法人日本環境NPOネットワーク事務局長）の司会進行で、報告とトークセッションが行われました。



2014年度より始まった、未来の環境保全活動を担う人材育成を目的とする「若手プロジェクトリーダー育成支援プログラム」。1期生が3年間の研修を終え、昨年12月10日に開催「環境基金活動報告会」においては、1期生11名の他に3名のコソ永正文氏（一般社団法人日本務局長）の司会進行で、報告としました。

本プログラムで何を学び、それをどう活動現場に持ち帰ったのかが、よく分かりました。これまでの経験を生かすとともに、学びをさらに深め、その成果をより多くの人に向けて発信してください。

本プログラムは、振興事業と助成事業を両輪とし、振興事業では3年間に活動戦略の立て方やファンドレイズなど9回の研修を実施。助成事業では、3年間の助成活動実施期間において年間上限300万円の活動推進費（賃金）を支援しています。

① 独立行政法人環境再生保全機構は、特定公益増進法人に指定されており、税制上の優遇措置を受けることができます。

② ゆうちょ銀行以外の銀行からお振込みいただく場合には、領収書が発行できません。領収書の発行を希望される方は、お手数ですが、地球環境基金部基金管理課（TEL:044-520-9606）へご連絡ください。

※この他にも、クレジットカードを利用したご寄付や、楽天銀行を利用したご寄付が可能です。詳しくはウェブサイトをご覧ください。

地球環境基金の情報館 <http://www.erca.go.jp/jfge/>